

## 序

「研究報告」第17集が、新春早々刊行の運びとなった。可憐な嬰兒が生まれるよりまだ嬉しい。それは誕生以前に、撫育の園の用意が既に出来るからでもあり、また、この号が東京教育大学附属校としての末子としての最後を飾るからでもある。「研究報告」は17回の年齢と歴史と実績とを重ねてきた。「去る者、日に疎し」というが、あの中には、会員諸氏並に先輩学者の皆様の真摯不倒の活力が横溢しているから、人物涵養の泉が湧いていると同時に、いつ読んでも新鮮味を増してくるものがあると断言ができる。

学問、教育の世界は、その研究が比較的に自由である。自分の思うことを良心的に筆陣を張って活躍する可能性が大である。もし反対の所論があれば、虚心坦懐に討議が行われ、旧態を改めて前進に向う。「必要は発明の母」と言うが、「研究は発展の父」との尊称を呈したい。研究にはその奥に、個性がある。すなわち、個性には二つとない独自の創意が宿っている。これは王侯の威武も屈することが出来ず、千万の金帛<sup>キンポク</sup>も曲げることの出来ない不滅の価値である。この度新に発表される諸君の研究は、私のこの信念を裏書きしてなお余りがある。

アフリカには茫漠千里果しなき砂原に「ピラミッド」がそびえ立っている。風雨幾千を冒かして。これは埃及文化の誇り許りでなく、全世界万目の驚異の一つである。併し、これは物体と物体とが機械的に物理学上、密着したにすぎない。我々は神秘的な魂が、意識的に、渾然と融化統一した教育の「金字塔」が我が校の研究で、長期を通して建設されることを望む。

1978年3月

東京教育大学附属駒場中・高等学校

校長 篠崎 哲